

新装版

有吉佐和子

和宮様御留

KAZUO MIYASAMA OTOME
ARIYOSHI SAWAKO

講談社
文庫



講談社文庫

新装版
和宮様御留

有吉佐和子

講談社

|著者| 有吉佐和子 1931年和歌山県生まれ。'56年「文學界」に掲載された「地唄」が芥川賞の候補になりデビュー。'67年『華岡青洲の妻』で女流文学賞、'70年『出雲の阿国』で芸術選奨文部大臣賞および日本文学大賞、'79年、本作で毎日芸術賞をそれぞれ受賞。'84年に逝去、享年53。主な著書に、『処女連禱』『紀ノ川』『三婆』『香華』『有田川』『日高川』『芝桜』『恍惚の人』『木瓜の花』『母子変容』『複合汚染』『悪女について』『開幕ベルは華やかに』など多数。

しんそうばん かずのみやさま おとめ
新装版 和宮様御留

ありよし さわ こ
有吉佐和子

© Tamao Ariyoshi 2014

2014年4月15日第1刷発行

発行者——鈴木 哲

発行所——株式会社 講談社

東京都文京区音羽2-12-21 〒112-8001

電話 出版部 (03) 5395-3510

販売部 (03) 5395-5817

業務部 (03) 5395-3615

Printed in Japan



講談社文庫

定価はカバーに
表示してあります

デザイン——菊地信義

本文データ制作——講談社デジタル製作部

印刷——豊国印刷株式会社

製本——株式会社千曲堂

落丁本・乱丁本は購入書店名を明記のうえ、小社業務部あてにお送りください。送料は小社負担にてお取替えします。なお、この本の内容についてのお問い合わせは講談社文庫出版部あてにお願いいたします。

本書のコピー、スキャン、デジタル化等の無断複製は著作権法上での例外を除き禁じられています。本書を代行業者等の第三者に依頼してスキャンやデジタル化することはたとえ個人や家庭内の利用でも著作権法違反です。

ISBN978-4-06-277811-4

目次

その一	万延元年六月三日	7
その二	万延元年六月二十日	31
その三	万延元年八月十三日・十四日	59
その四	万延元年九月二十七日	93
その五	万延元年十月十七日	125
その六	万延元年十二月九日	149
その七	文久元年四月二十一日	175
その八	文久元年四月二十三日	200
その九	文久元年六月十九日	235
その十	文久元年七月二十八日	257
その十一	文久元年八月四日	282

その十二 文久元年十月八日 320

その十三 文久元年十月十九日・二十日 345

その十四 文久元年十月二十三日より二十七日・十一月四日 373

その十五 文久元年十一月九日・十日 396

その十六 文久元年十一月十四日・十五日 420

その十七 文久元年十一月十四日・十五日・十六日 444

その十八 明治十年九月一日・二日 468

あとがき 497

解説 加納和幸 502



講談社文庫

新装版
和宮様御留

有吉佐和子

講談社

目次

その一	万延元年六月三日	7
その二	万延元年六月二十日	31
その三	万延元年八月十三日・十四日	59
その四	万延元年九月二十七日	93
その五	万延元年十月十七日	125
その六	万延元年十二月九日	149
その七	文久元年四月二十一日	175
その八	文久元年四月二十三日	200
その九	文久元年六月十九日	235
その十	文久元年七月二十八日	257
その十一	文久元年八月四日	282

その十二 文久元年十月八日

320

その十三 文久元年十月十九日・二十日

345

その十四 文久元年十月二十三日より二十七日・十一月四日

373

その十五 文久元年十一月九日・十日

396

その十六 文久元年十一月十四日・十五日

420

その十七 文久元年十一月十四日・十五日・十六日

444

その十八 明治十年九月一日・二日

468

あとがき

497

解説 加納和幸

502

和宮様御留

その一

客来が終つて、内裏へ帰る人々の蹕音が門から遠のいて行くのを、フキは厨の片隅で息を詰め、耳を澄まして聴いていた。屋敷に客のあるときは、下使いの者どもは口をきいても音ひとつ立ててもいけないのだつた。フキは年上の婢^{はしため}を見て、もういいのだと悟ると、手桶を右手で握み、暗い家から外へ飛び出した。夏が来ていた。陽光を切るように走つて、フキは井戸へ着いた。十数軒の公家屋敷^{くげ}が共有している井戸だが、今日は珍しく無人で、四本の柱が古びた茅葺^{かやぶ}きの屋根を支えている。その上に鮮やかに青い夏草が生えていた。梅雨があげたばかり、十分の水を得た後で、緑が勢よく繁っている。あんなところにも草が茂るのかと、見上げてフキは心楽しくなった。道端に生えているのと同じ草が、頭の上よりもつと高いところで繁っている。フキは

夏が好きだった。勤めが變つて日も浅いせいで、何を見ても珍しく、面白かった。これまで働いていた町方の家と、今の暮しでは見るものも聞くことも何もかも違っている。面喰うことばかりだけれど、フキは毎日が楽しかった。

釣瓶^{つるべ}を井戸に投げ落とし、力を入れて引上げる。フキは、顔を赤くして、水の一杯入

った釣瓶を井戸べりに乗せ、それを両手で抱え直して、手桶に勢よく空けた。冷たい水が音をたてて手桶の中で逆立ち、フキの足を濡らした。氣持がよかった。また釣瓶を落とし、力一杯で水を汲み上げ、また勢よく手桶に水を空けると、前より盛大に水が逆立つて、フキの膝から下が水浸しになった。フキは快い冷たさに踊るように足拍子を取り、一人で声を上げて笑い出した。前の町方の家では働く者の数が多く、喋った笑い笑ったりして暮していたのが、勤めが變つてからは、万事勝手が違つて、フキのようにならぬ娘は他にいない。家の中の暗さは、人間まで憂鬱にさせるのか、声をたてて笑うことなど絶えて無い様子だった。話相手もないままに、フキは水汲みをするときが一番楽しく晴れやかになる。第一に明るい。日中は何度でも井戸に通つて厨の水甕^みを盈たしておくのがフキの仕事だった。十四歳の年齢が、家の中の暗さや寂しさに耐えられなくなつたとき、フキはいつも手桶を提げて井戸へ走る。

釣瓶の水は何杯あけても手桶が盈たされることがなかった。フキがあまり勢よく水

をあけるので、手桶から湧き出るように水が溢れ、フキの足を濡らし、手桶の中は七分目以上にはならない。しかしフキは承知で、水と戯れているのだった。夏の光。冷たい水。フキは出来ることなら大声で唄いたところだつた。あと二、三日で祇園ぎおんさんがある。そう思うだけでコンコンチキチン、コンチキチンというお囃子はやしの鉦かねの音が聞こえてくるようだつた。公家奉公では八坂神社の祭礼に暇をくれるかどうかなどと思案するような齡ではなかつた。

ようやく手桶に水を盈たすと、フキは両手で持ち上げ、うんうんと唸りながら駈けて戻つた。水は手桶の中で今度は左右に揺れて跳ね、フキの胸から濡らしたが、フキは平氣だつた。厨の甕に手桶の水を空けるときは、中身は半分に減つていたが、フキは水汲みが楽しいのだから、遠い井戸から厨までの往復が何度になつても苦にならない。空になつた手桶を片手で持つて外へ走り出すと、明るい夏がフキを待っている。

フキは井戸の屋根に茂る青草を見上げて、声をかけてやりたかつた。名もなく花も咲かせずに終るであろう雑草が、フキには夏の陽光をおびただ夥しく浴びている贅沢な生きものに思えた。祇園さんのお囃子は、この草にも聞こえるだろうか。聞かしてやりたいものだと思う。フキは釣瓶を井戸に落し、えい、えいと声をあげて引張り上げた。釣瓶も、手桶も、フキの躰に較べるとひどく大きい。釣瓶についた綱は水で黝くろずんでい

て、フキの手首と同じ太さだった。使い古した手桶の方も、胴まわりはフキの躰と似た大きさだった。水を盈たした手桶を抱え上げると、フキはまた走る。水はフキの心のままに跳ねて、フキの着ている布子ぬのこを盛大に濡らした。

厨の大きな甕が一杯になるまでに、フキは川にでも落ちたように着ていた布子をぐしょ濡れにしてしまっていた。水汲みが終わると、フキは厨からまた外へ出て、素裸になり、脱いだ布子を絞った。粗い麻の布子から、かなりの水が滴り落ちた。陽光の下で、フキの裸身は輝くようだった。布子を陽に干している間、フキは躰を小さくして乾くのを待っていた。フキは夏の布子は、これ一枚しか持っていない。照りつける夏の日で、布子から幽かすかな湯気のようなものが立ち昇った。老女が名を呼んでいるのが聞こえたので、フキは生乾きの布子を羽織り、紐を締め直しながら厨の中に駆けこんだ。

陽光の下に長くいたので、厨の中はしばらくまっ暗だった。下婢が立って、こちらを振り返ったのが、ようやく見えた。

「私うち、名ア呼ばれたんと違ちがうん」

中年の下婢は、フキの大声に眉を顰しかめながら、たしなめるように低く答えた。

「観行院かんぎょういんさんのお帰りやし」

「観行院さんて、誰や」

「御前ごぜんの妹はんで、和宮さんをお産みなしたお方やないか」

「ああ、桂の御所から駕籠で来た人やな」

相手はますますフキの言葉遣いの粗さに辟易して、

「お召しやで。早う行き」

と言った。

「え、なんで」

フキは驚いて問い返した。この家で、お召しという言葉が使われるのは、橋本中納言さねあきら実麗と妻のお静、養子の実梁さねやなと妻の幹子の四人で、フキはこの屋敷に来てから今日

まで、どの一人からも呼ばれたりしたことがなかったからである。

「なあ、なんで、私うち、呼ばれたんやろか」

「知らんえ。お次はんに訊いたらよかろ」

主人側からの御用は直接老女が承うけたまわり、フキたち二人はその命令で下働きをしている。

その中立ちの老女をフキたちはお次と呼んでいた。そういえばフキの名を呼んでいたのは、お次だった。

「お次はん、何処に行つたん」

「お玄関やろ」

「玄関か」

フキは外へ駈けて、ぐるりと家を半廻りして玄関へ出た。門内で駕籠の戸が開かれ、観行院がそこに手をかけて乗りこむところであつた。お次の老女はフキの姿を認めると観行院に囁きかけた。すると観行院は振向いてフキを見た。青白い肌、濃い睫毛、頬が殺^そげたように痩せている。美しいけれど、嶮しい顔だとフキは思った。これがお局^{つばね}さんというものか。観行院の視線はフキに一瞬止まり、すぐ老女に視線を返して幽かに肯いたようだ。朱塗網代の駕籠の戸は下人の手で静かに外から閉^{とぎ}され、六人の肩に担われて地上からすると浮き上り、悠々と門口を外に出て北に折れ、行つてしまった。万事質素な公家の家とはおよそ不似合な、けばけばしい色をした乗物であつた。町方の駕籠とは色も形も違つていて、牛車の上を担ぎものにしたような妙な形であつた。

深々と頭を下げて見送つた老女は、フキを振返ると、

「なんで土下座せなんだ。和宮さんをお産みなされた尊いお方やのに」
と詰^なつた。

「お玄関で呼んでなさると聞いて飛出してきましたによつて。ほなら、観行院さんが